

十二年前の東日本大震災の折、津波によって流された岩手県陸前高田市の約七万本の松林の中からたった一本残った松は「奇跡の一本松」と呼ばれ、多くの方の手により大切に保存、修繕が行なわれてきました。現在では、塩害による倒壊の危険からモニユメントとして復元され、被災地のみならず、全国各地の方々に生きる勇気を与えています。

その後、陸前高田市内に保存されていた一本松の「根」の展示会が本紙発行元である倫理研究所の紀尾井清堂にて開催され、この度一年間の会期が終了しました。

会期中、見学者からは、「根がとても大きく、これだけ大きい根だったからこそ最後まで流されることなく立ち続けたのだと思う」と感動するものがありました。「『根』と対峙したとき、十一年前の震災のつらさ、悲しさを伝えるとともに、生きていくことの大切さを『根』が語りかけているようで、心が震えました」「津波という自然現象への驚異、その津波にも耐えて残った根への畏敬。人間としてどう生きるべきか考えさせられる展示会でした」等、多くの声が寄せられました。

津波から生き残った松の木を支えていたその「根」を目の当たりにしたとき、多くの方が感動に心を震わせ、生きる力が湧き出てくるような感覚を覚えたのです。

「奇跡の一本松」に代表されるように、木はそれぞれに根を通じてしっかりと大地



「ひとつながり」の世の中を生きる

なる大地とつながっています。同じ様に人間も、個々人の生命は目には見えない次元で大きい「いのちの源」に根差しています。その源を通じて、あらゆるものひとつながりを持ちながら、支え合い、尊び合い、生きていくことを私たちはどれだけ意識して生活しているでしょうか。

「共尊共生」を理念とした地球倫理の実践は、この見えない次元での「ひとつながり」を自覚することから始まるといってもよいでしょう。

つながっているからこそ、「人は鏡」と言われるように自らの心行ないが、鏡のように相手に映るのです。利他的な心行ないは、そのまま相手に映り、自分に返ってきます。逆に他者とのつながりを軽視すると「自分さえよければ」という自己中心的な心が肥大化し、調和を乱し、排斥や攻撃、破壊といった双方の不幸を招く心を生み出しかねません。

人を改めさせよう、変えようとする前に、まず自ら改め、自分が変わればよい。

（『万人幸福の葉』四十一頁）

つながりの対象は人に限らず、あらゆる生物、無生物、ひいては地球そのものにまで及びます。

あらゆる存在とのつながりを意識し、その対象を尊重する生き方を、まずは自分から始めてみましょう。その姿勢が「ひとつながり」を通じて周囲に広がり、「調和協調」の世界が広がっていくのです。